つながりを永遠に

～日本赤十字社が結んだ絆～

vol.5 全7回

日赤宮城県支部 防災ボランティアリーダー 大友明夫さん（74）

「命を救える人を育てるのが使命です」

大友さんのメッセージを動画でも公開中

取材時の様子を短編の動画にまとめました。右の２次元コードからアクセスしてください。

東日本大震災発生後、日本赤十字社が被災地で展開した支援のその後を追うシリーズ。今回は全国から駆け付けたボランティアの受け入れ・調整役として奔走した、日赤宮城県支部防災ボランティアリーダー大友明夫さん（74）＝塩釜市＝です。

教訓を糧に救急法指導　年50回

毛布4000枚、懐中電灯や携帯ラジオなどが入った「緊急セット」5000組、簡易マットや耳栓などからなる「安眠セット」2000組…。仙台市泉区明通にある日赤宮城県支部の救護物資倉庫は災害時に欠かせない品々を鉄骨2階の建物にびっしりと備える。

「災害が起きてからマニュアルを開くようでは遅い。平時から訓練も重ねて動きを身体に染み込ませておいてこそ、いざという時に役立ちます」。大友さんはヘルメット姿で倉庫内を見回りながら気を引き締めた。10年前、この場から物資を検診車に詰め込み、自らハンドルを握って被災地に急いだ記憶がよみがえる。

発災直後、対策本部で指揮を執る大友さん（左）。支部に3カ月間泊まり込んで被災地を後方から支えた＝2011年4月、仙台市青葉区堤通雨宮町の日赤宮城県支部

東日本大震災では発災から約3カ月間、日赤宮城県支部の会議室に泊まり込み、全国から来るボランティアの受け入れと調整の先頭に立った。がれきの中での活動で負傷したボランティアに手当てをしたり、ケガの応急処置法を伝えたり、夏にかけては熱中症対策の周知に注力した。泥かきやがれき撤去などの現場で汗する他団体とは一線を画した「日赤らしい活動」をけん引した。

ただ、胸には自省の念が残った。震災は県内の日赤防災ボランティア100人以上をまとめるリーダーに就いてわずか1カ月で起きた。訓練を予定していた矢先に見舞われた本番。「しっかりした備えができていれば、もっとできたことがあった」との悔恨が消えない。

教訓をどう生かすか―。大友さんはこれまで20年以上にわたって取り組んできた命を救う知識と技術を普及する「赤十字講習」の指導に力を入れることを改めて決意。新型コロナウイルス感染症の拡大で頻度は減っているものの、年に50回は指導員として人前に立ち続けている。心肺蘇生やAEDを用いた一次救命処置、応急手当を伝える「救急法」のほか、水に関わる安全を図り事故に遭遇した際の救助と手当の方法などを伝える「水上安全法」、乳幼児期に起こりやすい事故の予防とその手当を伝える「幼児安全法」など、多様なテーマで命を守る術を伝え広める。

今年2月上旬、宮城県内の高校で開いた救急法講習会でも高校生15人を前に「人が倒れています」「あなた119番をお願いします」と声を張り上げ、いざという時の手本を次世代に示した。「一人一人の防災や救命のスキルが高まれば、社会はもっと強くなります。私も体力が続く限り、命を救える人を育てることに貢献できればと思います」。自衛隊勤務35年で鍛えた心身を強みに啓発の最前線に立つ。

「ネットで検索すれば何でも答えが分かる時代です。でも、自ら身体を動かして覚えておかないといざという時、人はとっさには動けないんです。震災もあって、若い人でも防災に関心を持つ人は増えています。その芽をもっと大きく育てていきたいですね」。災禍を超えて、防災・減災のバトンを次代につなぐ献身は続く。

命を守るために、日ごろの備えと訓練の大切さを説く大友さん。マイカーには車中泊に備えた品々を常備し、いつでも現場に急行できる態勢を整えている＝2021年2月、仙台市泉区明通の日赤宮城県支部救護物資倉庫

企画・制作/河北新報社営業部